

道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を培う

これからの道徳の授業の在り方の一考察

齋藤 道子（東京都文京区立誠之小学校）

1 今、道徳の授業をしていて気になること

最近、道徳の授業をしていてちょっと気になることがある。それは、道徳的価値の自覚の深まりに顕著な個人差が見受けられるということである。一般的に考えてみれば「個人差」が見られるということは何も道徳の時間に限ったことではなく、他教科ではむしろ当然のことであって取り立てて特記すべきことではないのだろう。しかし、やっぱり何かこれまでとは違う感じがするのである。具体例を示しながらまずこのことについて少し触れてみたい。

今年私は1年ぶりに再び6年生の担任となり、5月に「けんじの忘れ物」という資料で公德心について道徳の授業を行った。その時の様子について簡単に紹介したい。

—道徳学習指導案—

平成22年5月9日
6年3組 37名

- 1 主題名 みんなのことを考えて
- 2 資料名 「けんじの忘れ物」(出典：文溪堂 みんなの道徳)
- 3 主題設定の理由 (略)
- 4 ねらい 公德心をもって法や決まりを守り自他の権利を大切にして進んで義務を果たそうとする心を培う。
- 5 本時の展開

	主な発問と予想される児童の反応	実際の児童の反応
導入	<ol style="list-style-type: none"> 1 インターチェンジのゴミ箱の様子の写真を見て話し合う。 2 みんなで使う場所や物ごとについて話し合う。 	<p>C：うわあ、汚いなあ。インターチェンジのゴミ箱だ。 C：連休で行った時もこんなだった。自分もやったことがあるけど家のゴミを捨てる人も結構いる。 C：学校、トイレ、公園、駅、電車、バス等</p>
展開(前段)	<ol style="list-style-type: none"> 3 資料を読んで話し合う。 ○ 木こ引掛かったビニール袋を見ているけんじはどんなことを考えているのでしょうか。 ◎ けんじはどんなことを考えてビニール袋を取りに戻ったのでしょうか。 	<p>☐C1：拾いに行かないといけない。(拾う) ☐C2：拾いに行かないといけないと思うけど、友達を呼んでいるし迷うなあ。(拾うか遊ぶかと迷っている) ☐C3：拾いに行くとお面倒くさい。(拾わない) ビニールより友達の方が大切だ。(拾わない理由を正当化) C：放っておいたら自然環境が悪くなる。 C：自分達がきれいに使わなかったら次の学年が汚くわなくなってしまう。 C：みんなが使う場所だからきれいに使わないと他の人に迷惑が掛かってしまう。</p>
展開(後段)	<ol style="list-style-type: none"> 4 自分達の生活を振り返る。 ○ みんなが使う場所やものについて初めにみなさんは色々な場所を挙げましたが、普段どのように使っていますか。 ※ 話し合い後に自分達の生活場面の写真を見せる。 	<p>C：みんなが使う場所だから大事にしようという意識はあまりしていませんでした。 C：みんなのことまで考えて使うことはあまりなかった。 C：自分が使うことしか考えなかった。</p>
終末	<ol style="list-style-type: none"> 5 今日の学習から公德心について考えたことを書きましよう。 ※ 「公德心」という言葉を押さえた後に書かせる。 	<p>C：今まではみんなで使う場所ということをあまり意識しなかったが、もっとみんなのことを考えて大切に扱わないといけないと思った。</p>

6 授業での様子

展開前段の「第一発問」において率直な子ども達の意見が出され、大きくC1・C2・C3の意見に類型化された。それぞれどの意見に自分は近いのかを聞いてみると、C1の「拾いに行く」が3名。C2の

「迷う」が24名。C3の拾いに行かないが(8名)だった。自我関与させることによって自分の立場が明確になったことにより、根拠に基づいて一層活発に意見交換が行われた。普通、C1の子どもがそのように思う理由を述べることで、大抵はC2やC3の子どもの意識に動きが見られるのだが、C3の子どもの意見が活発に出されて、C1やC2が反論をするのだがやや押されがちとなった。そして、あれやこれやと論議が成される中で、C3の立場をずっと取っていた女兒Aが言った。「みんな、うそつきじゃん。頭でそう思っていたって本当は拾わないじゃん。だったら、拾わないって正直に言えばいいのに。」衝撃だった。

「拾う」ということが善いことである(道徳的価値がある)ことを知ってはいるが、実際の自分達はどうなのだと正に人間のもつ弱さをついた発言だった。「確かに…」子ども達にとっては妙に説得力のある意見だった。しかし、ここで止まってしまうのは、道徳的価値の自覚を深め、人としてのよりよい生き方についてお考えを深めていくという道徳の時間の機能が果たせなくなってしまう。ここからどのように話し合いの舵取りをして道徳的価値の自覚を深めさせていったらよいのか、一瞬たりとも油断できない緊張の時間が走った。頭で理解しているこの子ども達に、コールバーグが述べているように、まずそこに道徳的価値があることに気づかせる必要がある。そして、その価値を自覚し自ら実践して試みることで、改めてその価値のよさを実感し、それを繰り返していく中で、真の道徳的実践力を培っていく必要がある。様々な考えが頭の中を瞬時に廻った。

そして、主発問である第二発問へと移った。「なぜ、けんじはビニール袋を取りに戻ったのか？」先ほどと同様に様々な意見が出された。「拾いに行くのは面倒だけど、それを放っておいたら確かに環境を悪くする」「一枚くらいと言ったけれど、みんながそうした考えだったら大変な数になる」「友達の友達が大事だっていったけど、どこかでビニール袋のことを気にしているわけだから心から楽しく遊べないと思う」「もし、自分達がきちんとマナーを守って使わなかったら次の学年の子が使わせてもらえなくなる」「みんなが使う場所だからみんなのことを考えないといけないと思う」さっきの女兒の発言は正直な自分達の姿ではあったが、「もし…」という言葉によって自分自身に置き換えて考えを深めてみると、「自分のことだけを考えてそのままにしたら大変なことになる」という気づきが出てきた。

そして、後段。公德心という価値に照らして自分の生活を振り返らせる。「みんなでする場所や物をどんなふうに使っていただろうか。」率直な意見が述べられるが、それはまだ少数である。そこで、具体的な子ども達の生活場面の写真を何枚か提示した。清掃用具の置き方、給食の食器の扱い方、図書館の本の使い方、移動教室でのトイレのスリッパの使い方、自転車置き場の様子、公衆トイレへの落書きなど、子ども達は自分達の身の回りの様々な生活場面を改めて見た。その時、初めて子どもの中にみんなが使う場所を使う時には、自他が果たすべき義務があることへの気づきが見られた。

以下は、終末で子どもが書いたものの一部と女兒Aのワークシートである。

僕ははじめ拾わない側でしたがこんな風になってしまうことを考えるとこれからは少し拾うように心掛けたと思う。(C3:TT)

やっぱり僕は拾わないと思う。だって面倒だから。(C3:OT)

僕は自分さえよければではなくみんなのことを考えなくてはいけないと思いました。これからは公德心をもって公共の場の使うように心掛けようと思います。(C2:KH)

自分に正直なのはいいけれど、それは自分中心に物事を考えているだけなので、もっとみんなのことを考えてみんなの場所や物は使わないといけないと思った。(C2:IK)

【C3の立場の女兒Aのワークシート】

道徳の学習 けんじのわすれ物

5月8日 木曜

【1】みんなが使う場所にどのようなものがありますか？

学校、公園、道、コンビニ

【2】みんなが使うものにどんなものがありますか？

パンチ、エスカルター、スリッパ、カー

【3】けんじは、枯れ木の枝に引っかかっているビニール袋を見ながらどんなことを考えていたでしょう。

ビニール袋が飛んで落ちていたらみんなが楽しそうに遊んでいるからビニール袋なんて死のままでいいわ

【4】今日の学習をもとに改めて【1】や【2】について自分自身を振り返り、思ったことを考えたことを書きましょう。

やっぱりコンビニや公共の場をこわしても別にそのまま取っておいたら平気だし、みんなのことを考えて後悔するほど大事なことを一つもできていないって思った

2 一体 何が問題なのか

公德心の欠如については、かなり前から問題視されてきたことであるが、今回の授業からも子ども達の意識がとても弱いことが分かり、改めて学校教育が取り組むべき重要課題であることが認識された。

また、先述した道徳的価値の自覚の深まりに見られる個人差についても、この事例の中でも顕著に表れていたと思う。よって、以下においては、「道徳的価値の自覚とはどのようなものなのか」そして、そこに「差が生じるのはなぜなのか」について少し考えてみたい。

(1) 道徳教育の目標は何か (学習指導要領解説 道徳編 P22)

- ・ 人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を培う。
- ・ 豊かな心をはぐくむ。
- ・ 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が気にと強度を愛し、個性豊かな文化の創造を図る人間を形成する。
- ・ 他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献する人間を育成する。
- ・ 未来を拓く主体性のある日本人を育成する。



道徳教育は、上記の資質を支える基盤となる道徳性を培うことを目標とする。

(2) 道徳の時間の目標は何か (学習指導要領解説 道徳編 P23)

道徳の時間の目標は、道徳教育の目標に基づいて、各教科、外交後活動、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、①計画的、発展的な指導によってこれを②補充、進化、統合し、③道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、④道徳的実践力を育成するものである。

(3) 道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深めるとは何か

(学習指導要領解説 道徳編 P29)

道徳的価値の自覚については、発達の段階に応じて多様に考えられるが、例えば、次の3つの事柄を押さえておくことが考えられる。

- ① 道徳的価値についての理解である。
道徳的価値が人間らしさを表すものであるため、同時に人間理解や他者理解を深めていくようにする。
- ② 自分とのかかわりで道徳的価値が捉えられることである。
そのことに合わせて自己理解を深めていくようにする。
- ③ 道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われることである。
その中で自己や社会の未来に夢や希望がもてるようにする。

なかでも、人格の基盤を形成する小学校の段階においては、児童が道徳的価値の自覚を深め、自己の中に形成された道徳的価値を基盤として、自己の生き方についての考えを深めていくことができるようにすることが大切である。

児童は、道徳的価値の自覚を深める過程で同時に自己の生き方についての考えも深めているが、特にそのことを強く意識して指導することが重要である。

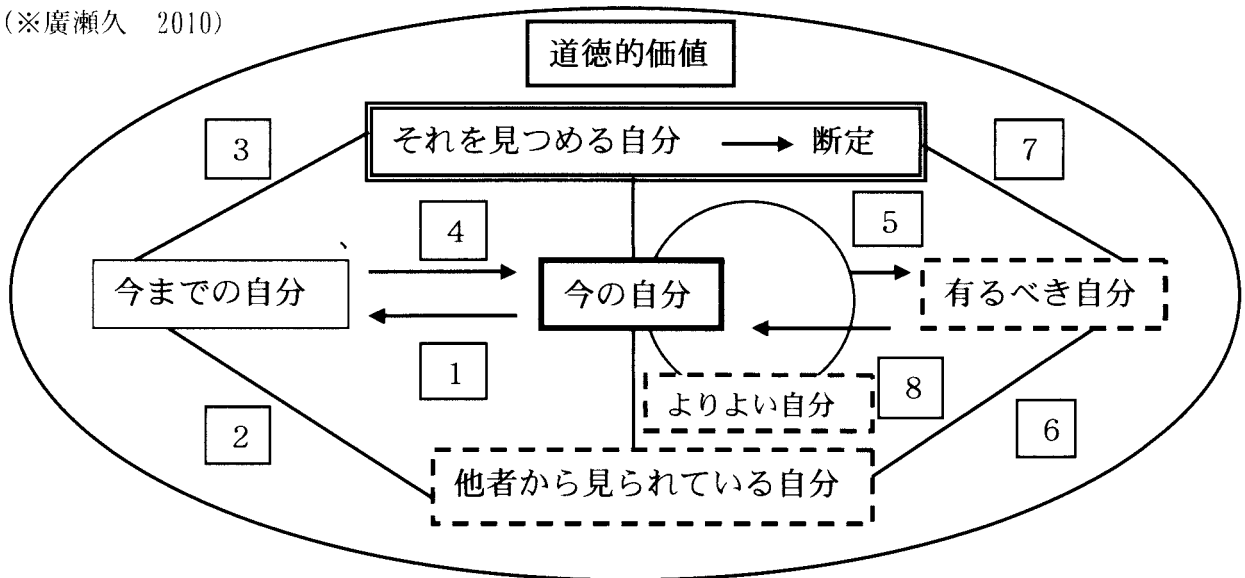
例えば、まず、児童がよりよくなるとうとする自分を感じ、自己を肯定的に受け止められるようにする。また、他者とのかかわりや身近な集団の中で自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめられるようにする。それと共に現在の生活及び将来の生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めることができるようにする。

つまり、道徳的価値とは、人が人としてよりよく生きていくために身に付けるべき道徳性の基盤を成すものであり、道徳的価値の自覚を深めるには、まず、価値を理解し、次に自分とのかかわりで道徳的価値を捉えてその価値のよさを感じ、さらにその価値を自分なりに発展させていこうとする思いや願いを抱くことである。

先述した「けんじの忘れ物」の授業で言えば、「公德心をもって生活することによって自他の権利が大切にされ互いに気持ちよく生活することができる」というのが道徳的価値の理解であり、第一発問と第二発問によって価値への気づきが促されている。また、後段の発問によって、自分とのかかわりで改めてその道徳的価値について振り返り、話し合いによって改めてそのよさを感じることで、自己のよりよい生き方についての考えを深めている。しかし、この価値の深まりに個人差があり、子どもの道徳性をはぐくんでいく中で、今後、大いに課題とされるべき点であると思うのである。

廣瀬氏は、この道徳的価値の自覚を深めるということについてその要素を以下のように捉え、価値の自覚を深めるとは、価値に照らして今までの（ありのままの）自分を振り返り、他者とのかかわりや身近な集団の中での自分を深く見つめるとともに、自分自身を内観することで今の自分を見つめ直し、将来のよりよい生き方を目指す上での現在の自分の課題を捉え、今後あるべき自己の在り方や生き方を実現させていこうとする思いや願いを抱くことであるとしている。

(※廣瀬久 2010)



(4) 道徳的実践力を育成するとは何か (学習指導要領解説 道徳編 P30～31)

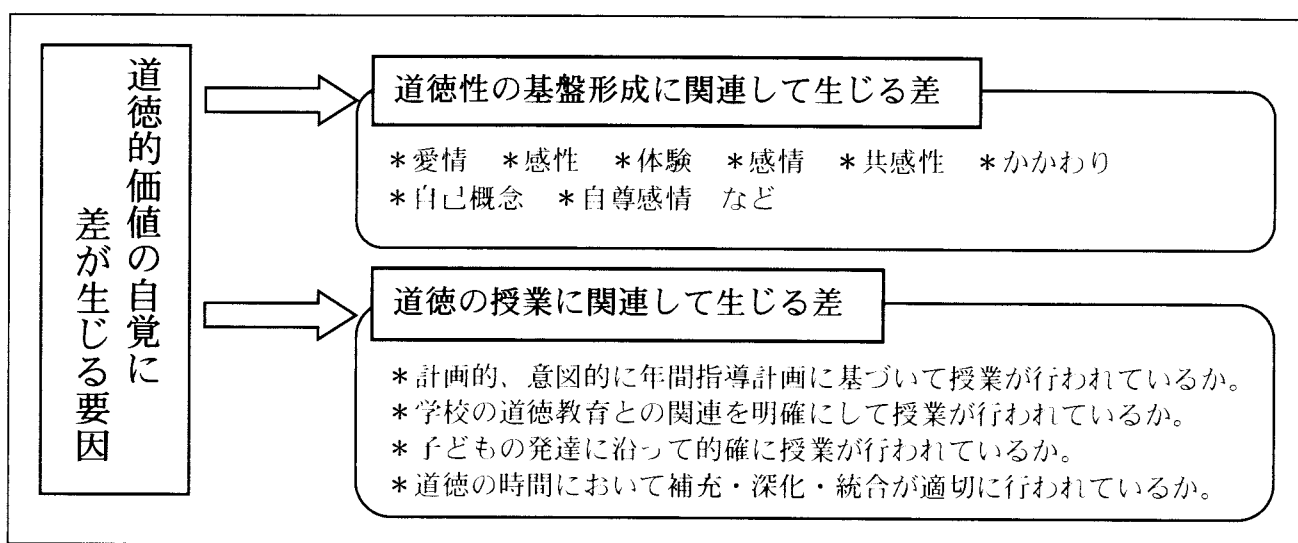
- * 道徳的実践力とは、人間としてよりよく生きていく力であり、一人一人の児童が道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、将来出会うであろう様々な場面、状況においても、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような内面的資質を意味している。それは、主として、道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度を包括するものである。
- * 本来、道徳的実践は、内面的な道徳的実践力が基盤になければならない。道徳的実践力が育つことによって、より確かな道徳的実践ができるのであり、そのような道徳的実践を繰り返すことによって、道徳的実践力も強められるのである。道徳教育は、道徳的実践力と道徳的実践の指導が相互に響き合って、一人一人の道徳性を高めていくものでなければならない。
- * したがって、道徳的実践力を育てることを目的とする道徳の時間においては、その特質を十分に理解して、教師の一方的な押し付けや単なる生活経験の話合いなどに終始することのないよう特に留意し、それにふさわしい指導の計画や方法を講じ、指導の効果を高める工夫をすることが大切である。道徳的実践力は、徐々に、しかも、着実に養われることによって、潜在的に、持続的な作用を行為や人格に及ぼすものであるだけに、長期的展望と綿密な計画に基づいた丹念な指導が成されなければならない。

すなわち、道徳的実践力とは、人間としてよりよく生きていく力であり、道徳的諸価値についての自覚を深め、自己の生き方について様々な判断や選択をしていく上で機能する内面的資質であると言えるだろう。また、それは、道徳的実践力によって具現される具体的な道徳的実践を繰り返し行っていくことで更なる道徳性をはぐくむものであり、道徳の時間はその道徳的実践力を育てることを目的として行われなければならない。そのためには、長期展望と綿密な計画に基づいた丹念な指導を行うことがたいせつであり、つまるところ、6年間における長期的な道徳の時間の展望をもち、子どもの道徳性の発達に即した適切でかつ、効果的な指導をきちんと積み上げていくことが重要であると言えるだろう。

言葉で言うことはたやすいが、私達教員は本当に各自がこのことを踏まえて意図的に1年間に35時間、6年間に210時間の道徳の時間の授業を行っているだろうか。今後、道徳の時間の在り方を見直す上でとても重要なことであると受け止める。

3 道徳的価値の自覚の個人差は何によって生じてくるのか

では、次に、道徳的価値の自覚の個人差が生じる原因は、一体何なのかについて考えてみたい。そこには大きく2つの原因があると思われる。一つは、「道徳性の基盤形成に関連して生じる差」であり、もう一つは、「道徳の授業に関連して生じる差」である。



4 道徳性の基盤形成に関連して生じてくる差について

(1) 道徳性の発達の視点から

周知の通り子どもの道徳性は、学校に就学してから後にはぐくまれるものではなく、この世に生を受けて、いや、もっと以前の母親の胎内に生命を宿した時からにはぐくまれるものと思われる。このことについては、発達という概念からピアジェやエリクソンやコールバーグ等が、道徳性の発達段階について様々に述べているので、以下の一覧表にまとめてみた。

年齢	ピアジェの発達段階	コールバーグの道徳発達段階	エリクソンの発達段階説	
0	感覚運動期	前慣習的水準	第1段階 罪と服従への志向	
1				乳児期 「信頼」対「不信」
2			幼児期前期 「自律性」対「恥・疑惑」	
3	前操作期	第2段階 道具主義的な相対主義志向	幼児期後期 「自発性」対「罪悪感」	
4				
5				
6	具体的操作期	慣習的水準	第3段階 対人的同調「良い子」志向	児童期 「勤勉性」対「劣等感」
7				
8				
9				

10	形式的操作期		第4段階 「法と秩序」志向	青年期 「自我同一性」対 「同一性拡散」
11				
12				
13				
14				
15	脱慣習的 水準		第5段階 社会契約的な法律志向	成人前期 「親密性」対「孤立」
16				
17				
18				
19				
20				
21			第6段階 普遍的な論理的原理の志向	成人期 「生殖性」対「停滞」
22				
				成人期 「生殖性」対「停滞」
				壮年期 「世代性」対「停滞」
				老年期 「統合性」対「絶望」

紙面の関係上、ここではエリクソンの発達段階説について少し触れたい。エリクソンは、人間の発達には「生物学的な発達」と「心理社会的な発達」があるとし、成長するものはすべて「予定表」を持っているとしている。全体を構成している各部分は、この予定表に沿って、その成長が特に優勢になる「時期」に発生し成長を遂げて再び全体に統合されていくという「漸成原理」の姿勢を取っている。つまり、人間は出生してから社会的な存在になるまで、予定された各発達段階に沿って成長していくものであり、その獲得の時期をうまく乗り越えられないとマイナス面の要素を得るようになり、その後の発達にも影響を及ぼすようになると述べている。

このことを道徳性の発達において考えてみると、子どもの道徳性を発達に即して順当にはぐくんでいくためには、大人が道徳性の発達についての理解を深め、乳幼児期の頃から計画的、意図的に道徳教育の基盤づくりにかかわっていくことがより大切であることが理解される。

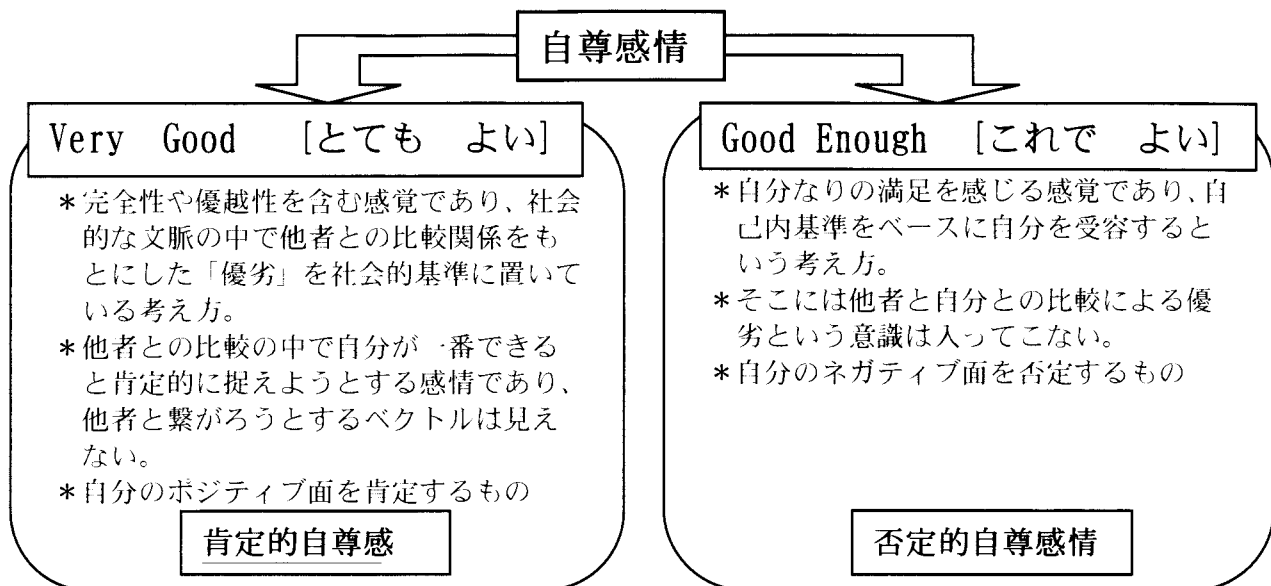
(2) 「かかわる力」と「自尊感情」の視点から

道徳性の基盤を形成する重要な要素の一つに「かかわり」があると考えられる。周知の通り、人間は一人では生きていけないものであり、人・もの・自然等の豊かなかかわりを通して、自己理解や他者理解を深め、人としてよりよい在り方や生き方を目指して自己実現を図っていくものと思われる。しかし、今、この道徳性をはぐくむ土壌とも言える「かかわり」が、都市化、核家族化、少子化等の社会的影響を受けて急速に子ども達の世界から失われるという深刻な状況にある。

これを受け、新学習指導要領は、より豊かなかかわりを通して子どもの道徳性を育むために、さらなる体験学習の充実に加えて全教育活動との効果的関連付けを図った道徳教育の推進を明示した。また、「かかわる力」の育成については、より内面的視点から「感性」や「健全な自尊感情」の育成を図っていくことの重要性についても言及した。そこで、以下においては、「自尊感情」と「かかわる力」の関連性について述べてみたい。

【自尊感情とは何か】

自尊感情とは、元々はself-esteem (SE) と称された心理学の概念であり、オーストリアのラルフ・ベットマンが人権教育の一端として著した「Teaching for Human Right :Pre-school and Grades」(1989年)によって日本に紹介された。多くの心理学者によって様々な定義付けが成されているが、私自身は「あるがままの自分自身を意味あるもの、かけがえのないものと感じ、自分を大切にしようとする感情」としたい。自尊感情尺度を開発したことで著名なローゼンバーグは、この自尊感情には2つの異なる意味があり、その一つは自分を「とてもよい」「Very Good」とするものであり、もう一つは自分を「これでよし」「Good Enough」とするものである。

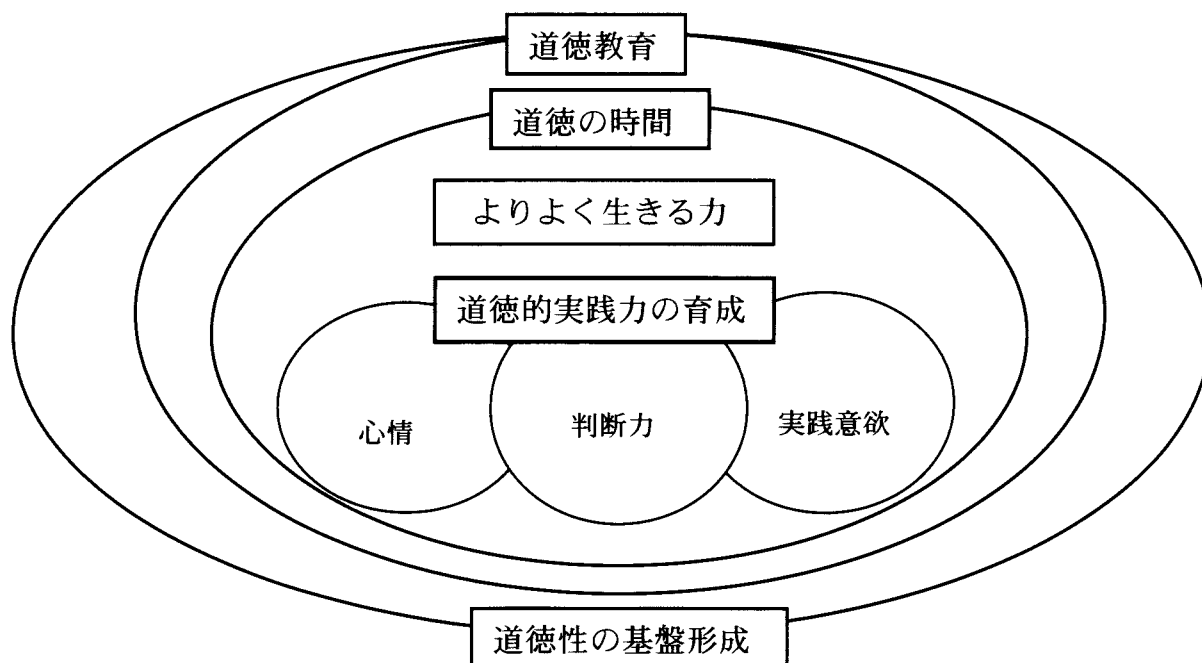


また、池田氏（大阪大学）は、この自尊感情について、それを構成する概念として「包み込まれ感覚」・「社交性感覚」・「勤勉性感覚」・「自己受容感覚」の4つを挙げ、「包み込まれ感覚」（自分の身近にいる人が自分を温かく包み込んでくれている。自分を愛してくれている。自分の気持ちを分かってくれているという感覚）が自尊感情をはぐくむ上で最も重要なものとしている。そして、もしこれを育成できなければ他の3つの構成概念を獲得するのは難しいと述べている。加えて、“家族とは、子どもの成長を支援するだけでなく、社会規範や道徳、文化といった子どもが社会で生活していくために必要な力を身につけさせていく役割を担っており、家族が子どもをどのように支援するのが、この「包み込まれ感覚」の育成に大きな影響を与える”とも指摘している。

このことから、子どもの道徳性の基盤形成において「自尊感情」やその前提となる「包み込まれ感覚」をはぐくむことは大切なことであり、それらがはぐくまれることによって子どもは自分に自信をもち、様々な人・もの・自然等と積極的にかかわって行くことができる」と述べている。つまり、自尊感情とは「かかわり」を促進するエンパワーメントとして機能するものであり、そうした様々な「かかわり」を通してはぐくまれる道徳性の育成に重要な役割を果たしていると言えるだろう。

5 道徳的実践力を着実に培っていくにはどうしたらよいのか

さて、それでは次に、これまでの論を受けて一体どうしたら道徳の時間の目的であり、かつ、人としてよりよく生きていく力である道徳的実践力を培っていったらよいのだろうか。以下に一つのモデルを示してみたい。



すなわち、より確かな、生きて働く道徳的実践力をはぐくむためには、子どもが乳幼児期にある時から子どもにとって最も身近な大人である家族を核として「包み込まれ感」をはぐくみ、それを基盤として少なくとも児童期前半までに肯定的自尊感情の確立を図ることが大切である。また、それによって豊かなかかわりを積極的にもち、それによって道徳性の基盤形成をはぐくみ、児童期、青少年期においては道徳の時間を要として道徳的諸価値についての自覚を図り、それを通して自らのよりよい在り方や生き方についての考えを深め、将来におけるよりよい自己実現を目指して道徳的実践と道徳的実践力の行使を相互に行っていくことが大切であると言えるだろう。

6 授業をどう構築し、展開するか

上記の考えを受けて、では、どのような具体的授業実践を行ったらよいのか。授業設計の仕方と手順について考えてみたい。

- ① 校長の教育方針を受け、学校の道徳教育の全体計画を全教職員の共通理解の下に作成する。
- ② 学年における道徳の重点目標を定める。
- ③ 体計画を受けて、各教科、特別活動、外国語活動、総合的な学習の時間、各種行事等との関連を図りながら、年間指導計画を作り、全教職員が1年生から6年生までの指導内容を知る。
- ④ 年間指導計画に基づいて意図的、系統的、計画的に道徳の授業を行う。その際、毎時間ごとに道徳的価値の自覚が深められるよう、児童の実態に即して指導上の工夫を凝らす。
- ⑤ 道徳の時間で深められた価値をより実感し、道徳的実践力へ繋げるため、実践へと結びつける工夫をする。
- ⑥ 温かな児童理解に基づき、児童間、教師間に安心できる信頼関係を構築し、「包み込まれ感」や「自尊感情」を意図的、積極的にはぐくんでいく。
- ⑦ 道徳性の基盤形成に関わる諸要素を継続的にはぐくみ、道徳の時間において価値の自覚を図る上でそれらが発達に応じて機能し、より高い価値へと再構成されるようにしていく。

7 授業実践

第6学年 道徳学習指導案

平成22年 6月19日(土)
第6学年2・3組 74名
指導者：齋藤 道子・田尻 稔
GT : 高橋 勇市氏

- 1 主題名 かけがえのない命 3-(1) 生命尊重
資料名 「いのち 輝いて」 (開発資料) 齋藤道子

2 主題設定の理由

(1) わらいとする価値について

先月、文京区内で中学3年生の女兒が自殺するという大変に痛ましい事件が起きた。その詳細は分からないが、かけがえのないその尊い「いのち」が、様々な可能性と若さあふれる生命力をもちながら、自らの手で断たれてしまったという事実強く胸が締め付けられる思いであった。

あらゆる生物は、生物的生命を得ることによって始めて「生きる」ことができる。人間もまた然りであり、この意味において生物的生命は「生きる」ための根源であると言える。しかしながら、人間だけは、他の生き物とは異なり、その「生」から「死」に至るまでの時間を、自己の意思によって主体的に「生きる」ことが可能であり、自らの生き方に意味付けや価値付けを行い生きた証とすることができるのである。すなわち、人間は、生物的生命のみならず、社会的生命や精神的生命等をも有するものであり、それら複数の生命が個の中で統合されることによって生きているのである。よって、それらのバランスが著しく崩れた時、生命は危機的状況に陥ることがあり、生物的生命そのものが失われるという事態に至ることがあるのである。

これらのことから、本年度は、「生命尊重」に重点を置いて道徳の授業を行い、年間を通して総合单元的に複数時に亘って取り組んでいく。そして、「生命のもつ諸要素」である「神秘性・偶然性・有限性・連続性・共生性・唯一性・成長性」の6つの視点から生命についての考えを深め、生命のかけがえのなさを実感させていくことによって、自他の生命を尊重し大切に生きていこうとする、正に「生きる力」を培いたい。

(2) 児童の実態について

日々の児童の生活を見ていると、前思春期を迎え、様々な出来事を通して「自分というもの」についてあれこれと考え始め、自信をなくしたり、不安になったりしながら自分なりにバランスをとって生活しようとしている様子が見て取れる。特に、女兒は、その傾向が男児より顕著であり、集団の中での自分と個としての自分の存在について考えたり、親や家族との関係性について考えたり、自分の将来について考えたりと、様々なことについて悩んでいるのが分かる。そうした児童が自分の存在そのものをよしとし、ありのままの自分を大切に思い、自分に自信をもってこの複雑な時期を乗り切れるよう、健全な自尊感情の育成を図りつつ、「生命尊重」にかかわる道徳の授業を展開していきたい。児童の実態については、まだ、分析中ではあるが、少子化、核家族化に伴う人、もの、自然とのかかわりの欠如や、内面的親子関係の不確立等が、丁度こうした不安定な時期に無意識的に顕在化してくる。よって、そうした面からの調査を並行して行いしつつ、より児童の心に響き、自他の生命を大切にすることを育てることができるような授業実践を進めていきたい。

(3) 資料について

高橋勇市さんは、1965年、秋田県横手市に高橋家の長男として生まれた。やんちゃな小学生時代を送り、中、高学生時代は陸上部に入って練習に励んでいた。しかし、17才の時、急に視力が落ち、医師から難病である網膜色素変性症と診断されて「20才までには失明するだろう」という衝撃的な宣告を受けた。初めの頃は、「そんなことはウソだ。」と自分に言い聞かせ、何とか前向きな気持ちで生きようとしたが、徐々に目が見えなくなっていく現実にもぶち当たり、不安と恐怖に苛まれながら辛い日々を送ることとなった。そして、ある日、自分自身に自信をなくし、将来への絶望感から自暴自棄となって、刃物を手にして自らその命を絶とうとした。運よく、異変をいち早く察知した母が駆けつけて、間一髪、生命の危機的状況を切り抜けた。その後、深い愛情をもって見守る家族や、温かく励ます身近な人々の支えによって徐々に気持ちを立て直し、19才の時にマッサージ師になるための学校へと進んだ。急速に進行する目の病状と闘いながらの辛い勉強であったが、失明すると宣告された20才を乗り切り、21才の時、見事、国家試験に合格した。その後、マッサージ師としての仕事をしながら生計を立て、いつしか30才を迎えた。

そんなある日、いつものように仕事をしていると、ラジオからアトランタ・パラリンピックで、全盲の日本人選手がマラソンで金メダルを獲得したというニュースが流れた。初めてパラリンピックの存在を知り、若き時代に燃えた陸上に思いを馳せて、もう一度走ってみようと思いを抱いた。しかし、夢は抱いたものの、現実には想像を絶する苦難の連続であり、たった数十メートルを走るのにも何百回も転ぶ有様だった。けれども、どんなに辛くても決してその夢を諦めることはなかった。2000年のシドニー・パラリンピックに向けての猛練習が始まった。しかし、過酷にも大切な選考会が行われる福知山マラソン当日、左大腿骨頸部骨折となり無念の途中棄権となった。悔しさが全身にこみ上げた。しかし、自分が抱いた一縷の夢を、生きる希望の光をそう簡単に諦めるわけにはいかなかった。ただ、ただ前だけを向いて何か月にも渡る辛いらハピリの日々にも耐えた。

2004年、ついにアテネ・パラリンピックの出場権を獲得し、全盲の部、男子フルマラソンに出場して長年の夢であった金メダルを手にした。「今日まで夢を諦めずに走り続けて本当によかった。あの時死ななくてよかった。みんな支えてくれてありがとう。生まれてきてよかった。生きていてよかった。」

読み物資料も作成したが、今回は、ゲストティチャーとして本人においでいただけるので、高橋さんそのものを生きた資料としてインタビュー形式で起用し、その生の姿に直に触れながら五感を通して価値についての自覚を図っていきたい。

展開の前段では、ある日突然、失明の宣告を受けた高橋さんが、それをどのような気持ちで受け止め、どのようにして乗り越えてきたのかについて考えさせたい。加えて、金メダルを手にした時に、感謝の言葉と共に高橋さんが発した「生きていて本当によかった。」という言葉の意味について深く考えさせ、その時の実際の映像や実際の金メダルを見ることによって、更に実感として子ども心に響かせ、「生きることの素晴らしさ」や「命の尊さ」を十分に感得させたい。

また、展開後段では、価値に照らして自分自身の存在の意味や生きていることの素晴らしさを改めて振り返らせ、自分の存在を意味あるものと感じ、自分自身に自信をもって前向きに生きていこうとする気持ちを培いたい。

3 指導上の工夫

- ・高橋さんのその時々のお気持ちをより共感的に考えられるよう、事前に学級活動の時間でアイマスク体験をさせ、視覚を失うということの大変さや不安さを実感させる。
- ・高橋さんの略歴から、高橋さんに覗きたいことを児童から聞き、それに基づいて発問を構成し、児童が課題意識をもって授業に参加していけるようにする。
- ・椅子に座っている高橋さんにインタビューをするという形式で授業を進めていくため、価値に関わる子どもや高橋さんの発言については意図的に補助発問を行い、価値の自覚を深めるようにしていく。
- ・また、板書を整理して書くことで、高橋さんの心の変化がよく分かるようにしより共感的にその時々のお気持ちについて自分自身に置き換えながら考えていけるようにする。

4 本時のねらい

- ・「いのち」があることの素晴らしさを感じ、自分の存在や生命を大切なものと感じて前向きに生きていこうとする心を育てる。

5 展開

	○主な発問 と ・予想される児童の反応	◇指導上の留意点
導入	1 アンケート調査を見て命こらえて話し合う。 高橋さんを紹介し、「いのち」や「生きる」ことこらえてみんなで考えていくことを知る。	◇事前にアンケート調査を実施する。和やかな雰囲気作りをし、子どもの発言を牛かして本時の学習課題を設定する。
展開 (前段)	2 高橋さんとのインタビューを通して、その時々のお気持ちこらえて考える。 ○失明を宣告された時、どんなお気持ちだったのか。 ・信じられない。ウソだろう。(否定) ・これからどうやって生きていけばいいんだ。(不安) ○目がだんだん見えなくなっていく時、どんなお気持ちだったのか。 ・やっぱり現実なのか。嫌だ。(否定) ・辛い。今まで出来ていたことができなくなっていく、自分が嫌だ。自信がもてない。(自信の喪失) ・治らないなら好き勝手に何でもやってやれ。(自暴自棄) ・死んでも生きていく意味がない。(絶望・逃避) ○高橋さんが、パラリンピックに向けて、つらい練習や様々な困難を乗り越えられたのは、なぜだと思うか。 ・現実なんだ。悩んでいてもしょうがない。(受容) ・自分が死んだらみんなが悲しむ。みんなが励ましてくれている。(繋がり・励まし・支え) ・自分より大変な思いをしている人がたくさんいる。その人たちも頑張っている。(勇気) ・自分こら健康なおかげがある。生きている。(生命の自覚) ・走ることなら自分こもできそうだ。(希望) ・足こら自信がある。(自信の回復) ◎金メダルを手にした時、高橋さんはどんなことを思ったか。 ・みんなが支えてくれたおかげだ。ありがとう。(感謝) ・やれればできる。苦労した甲斐があった。(喜び・自信) ・あの時、死ななくてよかった。生きていてよかった。(命の尊さ・素晴らしさ)	◇高校生になるまでのことを簡単なインタビューを通してつかませる。 ◇アイマスク体験を牛かし、失明を宣告された時のお気持ちこらえて考えさせていく。 ◇死にたいと思った高橋さんのつらい思いを直に聞くことにより切実なお気持ちが感じ取れるようにする。 ◇失明しても生きている自分がいることを自覚し、精神的に前向きに生きていこうとする高橋さんの様子をお話かせていく。◇命あることを心から喜び感謝する高橋さんの心を押さえるとともに、これまで支えてくれた人への感謝、そして希望をもって自分こら自信をもって生きることの素晴らしさを押さえていく。 ◇実際の映像を見ることによってより内面的に自覚を深める。 ◇「命があったからこそ」「あの時なかったからこそ」今の自分がいるのだという点を押さえ、命があるということの大切さや素晴らしさを感じ取らせていく。
後段	3 アテネ・オリンピックの高橋さんのビデオを見る。 4 板書を見ながら、学習の振り返りをする。 5 価値こら照らして自分自身を振り返る。 ○自分も生きていてよかったなと思ったことがあるか。	◇価値こら照らして自分自身を振り返り、価値を実感する。
終末	6 高橋さんのお話を聞く。 ※授業後、事後の指導として高橋さんに手紙を書く。	◇今もなお、新たな目標こら向かって前向きに生きている高橋さんの姿から、自分の存在を大切こらし、命を大切こして前向きに生きていこうとするお気持ちをより抱かせる。

6 評価

- ・高橋さんの話や姿から、生命があることや生きることの素晴らしさを感じ取り、自分の生命を大切にものと感じて、自信をもって前向きに生きていこうとする気持ちが高められた。

7 板書計画

8 実際の授業の様子

年間指導計画では、6月に「生命尊重」を取り扱う予定になっていたのですが、6月19日の道徳授業地区公開講座において「生命尊重」の価値項目で道徳の授業を行うことに決めていた。また、学級編成を新たにしたりばかりでまだ子ども達に自信のなさが見受けられていたため、自尊感情を高めつつ道徳の授業を行いたいと思い、マズローの欲求階層説に照らして「生命の誕生」を取り扱う予定としていた。

ところが、5月13日に文京区内の女子中学生が近隣にある公園のトイレで自殺をするという衝撃的な事件が起こり、子ども達も少なからずショックを受けた。加えて、「生命尊重」と「自尊感情」についてのアンケート調査を6月3日に実施したところ、大変に驚くべき実態が明らかとなり、とにかく、「自分自身が意味ある大切な存在であり、どんなに辛いことがあっても自ら命を断ってはいけない」という強いメッセージを子ども達に伝えなければならぬと思った。

そこで、本資料を選択するとともに、架空の話ではなく、現実の話であることからよりその価値を実感してほしいを思い、アテネパラリンピックの男子フルマラソンにおいて見事に金メダルを獲得した高橋勇市さんをゲストティーチャーにお招きし、インタビュー形式で授業を行うこととした。ご存じのように高橋さんは全盲であり、相手の表情や気配を見取って行動判断をしたり、意思の疎通を図ったりすることが難しい。従って、授業の前に電話で何回か打ち合わせをするとともに、実際にお会いして発問に即して授業のシュミレーションを行ったりした。

実際の授業は、2学級合同だったため体育館で行った。6月とはいえ大変に暑い日だった。保護者も毎年高橋さんが本校の運動会で走るのを見てはいるが、高橋さんにまつわる詳しい話を知っている方は少なく、関心をもって参観していた。

資料の力強さや魅力は、想像以上のものだった。子どもも大人も集中してその話に聞き入っていた。しかし、インタビュー形式であるため、いくら事前に打ち合わせをしていたとしてもそうそう紋切り型のように堅苦しく授業が進む訳ではない。高橋さんが話した内容を上手に繋ぎながら、ねらいとする価値の自覚を深めていくのが難しかった。自分としては、もう少し、子ども達と高橋さんがやり取りをする中で価値の自覚を深められるように運びたかったが、やはりそれは冒険的な試みであり、あっとホームな雰囲気の中で高橋さんそのもののお人柄に振れる場面は多々あったが、その反面、いかにねらいに沿わせていくかと、常に授業をしながら作戦を立てるのがたいへんな作業であった。

しかし、授業後に子ども達が書いた感想や後日になって何人かが書いてきた日記などを読むと、高橋さんの姿から前向きに生きることの素晴らしさや生きることの尊さを深く感得したようで、個人差はあるにしても、大方の所はねらいに沿って価値の自覚が成されたようであった。

アイマスク体験をしておいた感想・驚くべきアンケート調査の実態・実際の授業の様子・授業後の子どもの感想・事後の生活に見受けられた子ども達の様子や道徳的実践力を高めるために何を工夫しその結果どうだったのかと言う成果と課題については、発表の際にお伝えしたいと思います。